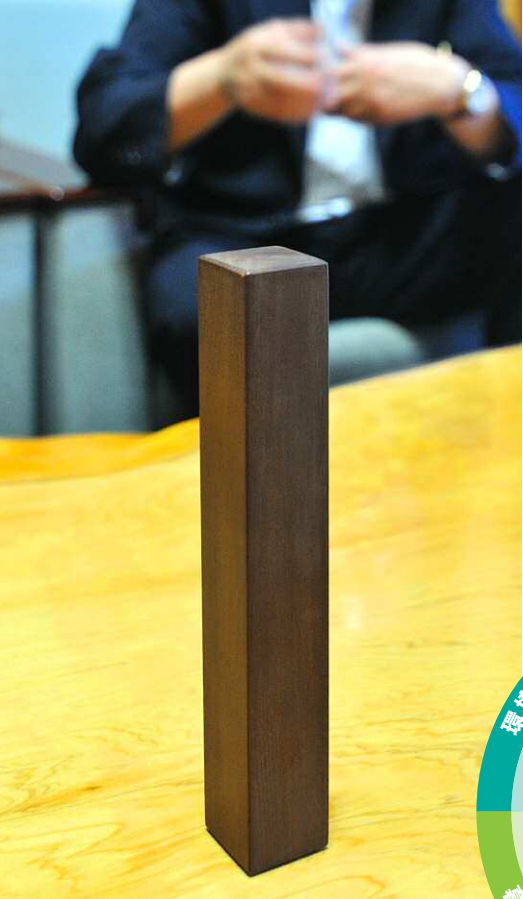
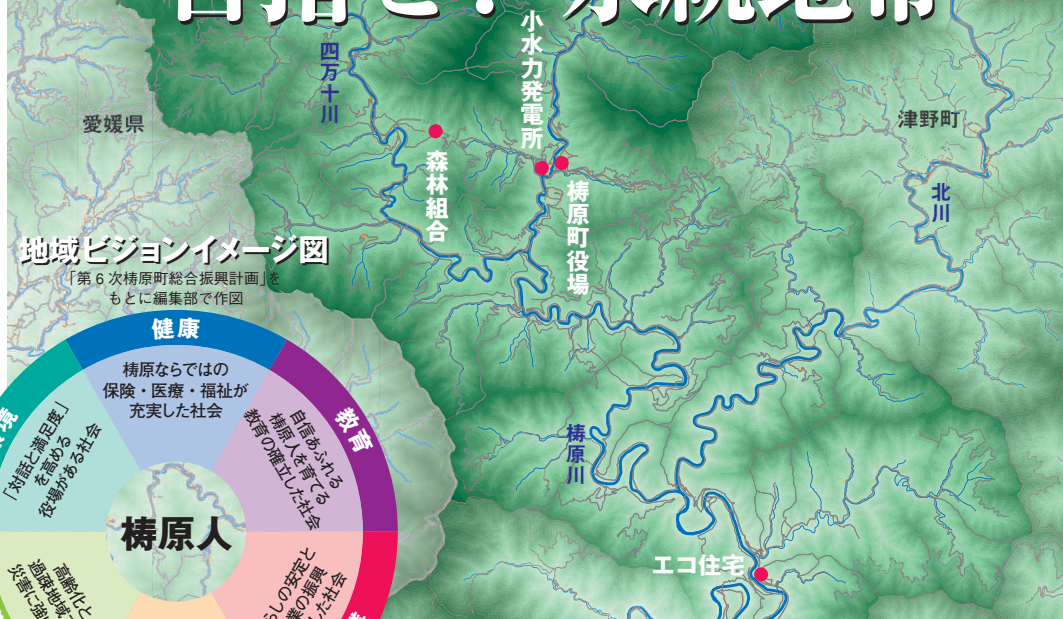


高知県高岡郡梶原町の挑戦

目指せ！ 永続地帯



矢野 富夫

やの とみお

高知県高岡郡梶原町長

1973年高知市立商業高等学校卒業後、梶原町役場に勤務。産業建設課長、総務課長を経て2001年退職し、梶原町助役就任(2007年自治法改正により副町長)。2009年第4代の梶原町長就任。高知県水源林造林協議会会長、全国森林環境税創設促進連盟理事。

2基の風車の売電収入が、環境基金につながった梶原町。そのほかにも県や国の補助金をうまく組み合わせ、温水器やペアガラスをはじめ、エネルギー問題や地球温暖化にかかわるすべてのことに対して、補助金、支援金を出してきました。大きなものをドンとやる力は、都市に負けるけれど、小さい町だからこそ、コンパクトな組み合わせができる、と矢野町長。小水力発電も、地域密着型の醍醐味の一つです。

うちの森林組合は、本部がドイツに置かれているFSC森林認証を、団体では全国に先駆けて(2000年(平成12)10月)取得しています。約4000人の町民のうち、1300人が森林組合の組合員、約60人が直接雇用されています。

森林組合の組合員は1300人

森林セラピー基地とセラピーロード
特定非営利活動法人森林セラピートンサエティによって認定され、2011年(平成23)現在、全国に44カ所誕生している。

効果も科学的に立証されつつあり、その認定をいただいています。
森林セラピーもやっていて、基地とロードを三つ整備しました。人混みに疲れている都市住民のみなさんにリフレッシュしていただく。元気になって、再生して帰っていただく。光・風・水・土・森林と森林セラピーを含めて、梶原町全体がクリニックだと思っています。その機能を創生しようとしています。森林セラピーの効果も科学的に立証されつつあり、その認定をいただいています。

木とともに幸せになる町

梶原やのって、字を読みましたか？
梶やのというのは、イスの木とも呼ばれる樹木の名前で、そろばんの珠に使われています。大変成長が遅いために、堅くて目が詰まって、重みがあります。宮崎地域が主産地なんです。宮崎地域がこの木が多

いことから名づけられたのでしよう。今は減ってしまった、植樹をするようにしています。
梶やのの字は、木偏に寿と書くのです。ですから私は「木とともに幸せになる町だ」と言っております。梶原町は91%が森林ですから、そういう聞かせて頑張っているわけです。
梶原では、1929年(昭和4

に村が電気利用組合という組織をつくって発電していました。小水力発電の出発点は、そこから始まっています。その後、国の法律が変わって、発電所は1936年(昭和11)に県に移管、1942年(昭和17)に電気事業者に移管しました。



右ページ：比重の高い、目が詰まった広葉樹（栲）の木片。
 上：栲原町では、森林の保全から森林資源の活用まで一貫した施策を行っており、2006年（平成18）に建てられた総合庁舎も町産材を使っている。設計は、建築家の隈研吾さん。窓から見えるブラインドも、町産材でつくられている。左は、現地を案内してくださった、環境推進課参事の矢野準也さん。



栲原は山深い土地ですから、伐採のためにワイヤーを張ったりするのはコストがかかりすぎるため、林道、作業道を含め、路網整備が不可欠であると考えています。これにずっと取り組んできて、現在54m/haの整備が済んでいます。全国の路網密度の平均は、おおよそ20m/ha程度だと思っています。

これは将来にわたって、森林を守り育てていくんだ、という意志の表われでもあります。このように路網をつけることは、森林資源の循環にとって不可欠なんです。国の政策も、だんだん変わってきています。昔は林道も曲がり角の角度とか勾配も決められていて、それを守らないと補助金が下りないようなこともありましたが、今は状況に応じた対応が認められるようになりました。一人ひとり人間が違っているように、木も生きていますから1本1本違う。山も同様です。

そうした個性に応じた路網をつけていくには、山や木の状態を見極める力も求められていると思います。できる限り山を傷めないで手入れしていく方法を選択するためには、状況を一番把握している地域に任せてくれたらいいんです。そういう方向に変わりつつあるのは、良いことだと思います。

栲原町エネルギービジョン

1999年（平成11）3月に栲原町エネルギービジョンを策定しました。

光・風・水・土・森林という地域資源を生かしているこう、という方向性が決定しました。光・風・水・土・森林というのは、いうなれば、地域資源です。その地域資源を生かし、そして「共生と循環」のまちづくりを目指そうと決めたんです。

これに先立って、1994年

（平成6）し尿に糞殻を混ぜて堆肥をつくる「土づくりセンター」を立ち上げました。1998年（平成10）には、地熱利用を始めました。町営の「雲の上のプール」の熱源の70%を地熱でまかなっています。地中熱も水力同様、昼夜を問わず一年を通じて安定的に利用できます。ですから、もっと利用していく方法があるんじゃないかと思っています。

1999年（平成11）4月には、カルスト台地（標高1485m）の標高、約1300m地点に風車を2基設置して、その売電収入が年間約3500万円生まれました。そのお金を循環の発想に則って、「自然から得たものだから自然に帰そう」ということで取り組みを

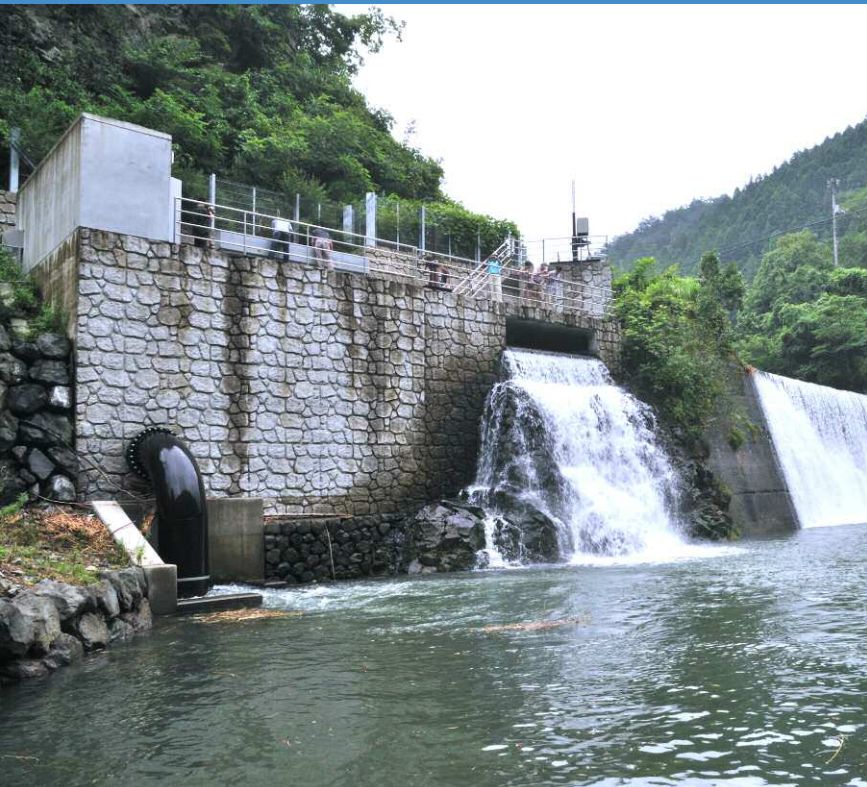
始めました。

その一つが、太陽光発電です。これで得られた収入は、住民のみなさんに1kWあたり20万円還元する、と決めています。だいたい普通の住宅ですと4kW発電できません。ですから1軒あたり80万円の補助金を出しています。この金額は、多分、全国トップクラスではないでしょうか。

それで栲原町に1780戸ほどある住宅の内106戸の住宅（設置率約6%）に太陽光パネルが設置されています。これも全国でトップクラスだと思います。

次に取り組んだのが、森林です。森林にはきれいな水を生み出す力とCO₂の吸収源という働きがあります。それで間伐をする際に1ha当たり10万円の助成をしました。この10年間で、補助事業以外に6億円ほど投入してきました。四万十川の流れる196kmありますが、源流の町として森林を整備することできれいな水をつくり、四万十川を通して太平洋に流入しています。ある方が言われました、まさに「森は海の恋人」を体現しているわけです。

国も今年から切り捨て間伐ではなく搬出し自給率を高めていこう、5haの団地化をし、その中で1haあたり10m²は搬出しなさい、という指導を始めています。



下・左：梶原町の小水力発電所は、54kWの出力。

左ページ：森林資源の活用施策の中心にある、第三セクター ゆすはらペレット株式会社の工場。製材端材や間伐材を木質ペレットに加工して、燃料として活用することで、循環型の森林経営が可能になる。

約4000人の町民の内、1300人が森林組合の組合員だ。2.5kgの原料が完成時には1kgに。1kgのペレットは、カロリー換算で灯油2ℓに相当する。ローラーで圧縮しながら押し出されると、木に含まれるリブニンという成分の働きで塊になる。



梶原は以前から間伐材を搬出しペレットとして活用してきました。循環ですから。柱や板にした木の端材もペレットにして使います。

木質ペレットをバイオマス燃料として利用する仕組みづくりにも投資してきました。矢崎総業という会社をご存知でしょうか。そこが30%、梶原町が51%、森林組合が10%、あとは製材業者から出資していただいて、ペレット工場をつくりました。今、操業3年目になっていきます。最大1800t/年の生産量が目標ですから、小さい工場なんです。仕組みが既にあるので、できています。

住民のみならずにはストロブの形でペレットを活用していただいています。公共事業所の冷暖房機器も矢崎総業が開発したペレット利用のものを使っています。矢崎総業の系列会社の四国部品という自動車の子組み電線をつくる会社を、梶原町で1991年(平成3)工場誘致したという関係があります。そのつながりを縁にして、いろいろな協力関係に至りました。

このペレットは農業用ハウスの加温にも使えるようになっていきました。高知県の森林率は84%で、全国でもトップクラスです。そのことを考えても、伐採した間伐材の搬出の仕組みを考えると、エネルギー問題に貢献できる余地は

大いにあると思います。

小水力発電

町立の中学校のそばに、落差が7mほどの水路があるんですが、そこを6・07mに修正して54kWの出力の小水力発電をつくりました。昼間は子どもたちのために使ひ、夜は町中の街路灯に使ひます。

今後、小水力発電を設置しようとしたら、私は水利権が一番の課題だと思います。

これからは農業用ハウスなど、電気をたくさん使っている農家にも供給したいので、小水力発電の設置も進めていきたい、と思っています。

エネルギー自給率100%

こうして光・風・水・土・森林の地域資源を活かして、現在、梶原町のエネルギー自給率が約28・5%なんです。わたしはこれを2050年(平成62)までに100%にしたい、と今、プロジェクトを組んで検討しております。つまり、梶原は2050年には電気の足りない町を目指しているんです。その目標に向けて、風車の部門で新たなプロジェクトを起しています。

町の総合庁舎は5年前、2006年(平成18)にできました。すべて地元の木材でできていて、ブラインドも杉です。屋根には80kWの太陽光パネルを載せています。夏は、電力利用が減る夜間に氷をつくり、それに風を送って冷風を地下に送り、床から出しているんです。風を循環させる仕組みなんです。冬は夜間、上でお湯を沸かしておいて暖房に利用しています。

こうした政策のすべての始まりは、1999年(平成11)に補助金を使って設置した、2基の風車の売電収入にあります。それが環境基金になったわけです。また、ここは過疎地域ですから過疎債も利用しています。

過疎対策事業債

過疎地域自立促進特別措置法に基づき、公共施設や情報通信基盤などを整備する事業を対象とした債券。償還期間は据置期間を含み12年以内。2010年度(平成22)からは、ソフト事業にも充当できるようになり、義務教育学校の統廃合要件も撤廃され、太陽光、バイオマスを熱源とする自然エネルギー利用施設にも充当できるようになった。

実は梶原町は1963年(昭和38)に大きな災害と積雪被害があったんです。梶原北部の地区では累積の積雪が、なんと11mに達したのです。それからの復旧を契機にして、そこから社会资本整備に努めてきたんです。そのほかにも



県や国の補助金をうまく組み合わせてきました。これ以外にも温水器やペアガラスに補助金を出したり、エネルギー問題や地球温暖化にかかわるすべてのことに対して、支援金を出してきました。

農業、林業、畜産と公共事業との複合経営もやってきました。今でも風車のあるカルスト台地に、夏山冬里方式で放牧をしています。夏に草を食べることで刈り取りをしなくて済みますから、これも循環なんです。冬は山に入って林業に従事しています。

人こそ社会資本

私が榑原に生まれてずっと思ってきたのは、モノをつくるということはお金さえあればできますが、運営していくのは、結局、人だということ。特別会計を合わせても、年間100億円ぐらいの財政規模の小さな町である榑原が生きていくためには、お金だけではダメなんです。

では、どこに力を入れたらいいか。人です。人こそが社会資本ですから、人と人が絆をどうやって強めていくか。そこには対話力とか学習意欲が求められます。いつも職員に言っているのは「自分の知識は小さいものだ。それを分厚くするためには学習をしよう

よ」と。

今までは、ビジョンをつくるという内容だったのですが、私が昨年つくったのは「考え方の方向性を示す」だけ。時代の流れで社会は動いていますから、社会が変化しても柔軟に目標に向かっていけるようなビジョンをつくる必要があるのではないか、と思ったからです。

昨年は、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」を活かさせていただき、高知県の三つのサテライト会場の内の一つとなった「榑原社中」に、大勢の観光客が訪れました。9万9099人来たんです。10万人と言った方がいい数字ですが、10万人に届かなかった分を、次へのチャレンジにすることが大切です。

龍馬以外にも「再生可能なエネルギーの里」ということで注目されているんです。職員たちも視察ラッシュに駆り出されていますが、住民サービスもなくてはなりませんからできるだけ時間を決めて対応しています。

子育てしやすい町に

ここに企業を誘致するのはとても難しい。でも交通の便が良かったことで、子どもを育てやすい環境の榑原に住んでもらって、町

外で働くことが可能になります。

今年の4月から、学校も小中一貫校にしました。子どもの成長に合わせて4・3・2制です。私は、今の時代の教育はこれしかない、と思ったんです。地域ぐるみで子どもを育てていくことを実現するには、このスタイルが最適だと考えました。

3・11の大震災と福島原発事故をきっかけに、私は日本人の生き方が大きく変わると思っています。そう考えると、榑原町を魅力的だと思っただけで移住してくれる人が増えるんじゃないかと思うんです。今も、何名か引き合いがあるんです。榑原はエネルギーも食料も自給率が高いですから。

トンネルや道路の整備で、愛媛県の松山まで1時間で行かれるようになりました。逆に高知までは1時間半かかる。ですから、今後は愛媛圏にも流通が広がる可能性があつて、久万高原町との連携も視野に入れているところです。京都の左大臣の子ども、藤原経高という人が伊予(愛媛)を経て入ってきたのが榑原の始まりといわれています。913年(延喜13)のことです。ですから愛媛県との交流は昔からあったんです。

また住の分野では、「ライフサイクルカーボンマイナス住宅」と名づけて、実験を行なっています。



《雲の上の町ゆすはら》は、梶原町のキャッチフレーズ。その《雲の上の町ゆすはら》の特長を最大限に生かして建てられた《CO₂を出さない家》には、下組と松原に体験型モデル住宅がある。写真は松原のモデル住宅。太陽光発電、太陽熱発電、雨水タンクはもちろんのこと、町の特産品であるペレットを使うストーブも設置されていて、家を建てようとする人も体験して決めることができる。

つまり木を伐ってから家を壊すまでCO₂がゼロになるような家づくりをしています。そして家を建てる時に環境に配慮した梶原の材木を使ったら、200万円の助成をしています。加えて40歳未満の場合は、100万円の上乗せをしています。

木造住宅で1坪に1㎡の木材が必要と考えて、30坪の家でだいたい30㎡になります。それに単価を掛けると約200万円。ですから、木材価格がタダになるという計算です。それに加えてペアガラスもペレットストーブも太陽光パネルも補助が出るんです。

梶原のまちの駅「ハマルシユすはら」には電気充電スタンドも設

置してあります。自治体で最初に入れたのは、四国では梶原がトップとっています。普通の家で充電するには14時間かかりますが、役場の充電所では8時間、「ハマルシユすはら」では30分で完了する急速充電設備です。

太陽光発電もうまく蓄電すれば、災害に強くなります。山間部では倒木や積雪で電線が切れることもありますから。これからはそうした場合に備えて、各家庭に充電器を安く提供すれば、電気自動車も充電できるし、いざというときはその電池を車から外して利用できますね。

一方で、ゴミ収集車は天ぷら廃油で動かしています。これをうまく利用したら、木材運搬にも貢献できます。木材をトラックで輸送すると、CO₂のことを言われませんが、天ぷら廃油だったらゼロで済む。都市に木材を運んで、帰りは都市の天ぷら廃油をもらってききたい。

梶原では、このようなコンパクトシテイ構築を視野に入れているんです。大きなものを一つドンとやる力は、都市に負けます。しかし、小さい町ほど、こうしたコンパクトな組み合わせができるんですよ。まさに、これこそが地域密着型の醍醐味だと思います。

